

俳句文学館

発行所
社団法人
俳人協会
東京都新宿区
百人町3-28-10
郵便番号160
電話(03)367-6621
(代)

発行人 草間 時彦
定価 100円(送料別)
(年1,000円
送料300円)

振替口座
東京6-273番

俳人協会 創立20周年

記念俳句大会 来年9月の全国大会 へ向けて各地で開催

4月 大阪
5月 京都、名古屋
6月 松山、札幌、金沢、仙台

創立二十周年記念として、俳人協会が昭和五十七年度に各地で開催予定の記念俳句大会は、事務局と現地担当者との鋭意計画を進め、十月末にはその大体的計画が煮つまるに至った。

関西俳句大会は第十七回となるが、五十七年度は記念大会として四月十一日に大阪福地指導センターで開催される。関西俳句大会は毎年、出席者が増加する一方であつて、今回は記念大会とするため、特に多数の出席が予想されている。講師は東京から井本農一氏を招き、西原一彌、村松道平の演題で講演が行なわれることが決まつた。

関西では大阪の関西大会とは別に、京都で京都府・滋賀県在住の会員の集いが五月三十日、京都市楽友会館で開催される。これは、桂樹齋氏が本部の要請に応じて実行委員長となり企画されたもので、当日句会のおと、懇親会を兼ねる予定である。

京滋会員の集いと同日五月三十日には、名古屋で東海三県記念俳句大会が開かれる。本部としては、草田野氏の健康を許せば、是非出席を願いたいとの意向である。

4～6月には広島で中国地方は広島での開催が決定し、宮原双喜氏が中心となつて計画中である。その時期は他の地方と同じく、五十七年四月～六月となる見込みである。

北海道は五月二十二日、札幌で開催の観が内定しており、近く実行委員会を結成する見通しになつてゐる。勝又木風雨氏、それを助けて北光星・岡沢康司両氏が委員会の中心となるものと見られる。

北陸大会は四月十八日、金沢で高島節雄氏が実行委員長として準備を進めている。

東北については本部としては、仙台を希望しているが、現地の組織が未確立のため、近く、関係者を協議の予定である。静岡についても同様である。

これらの記念大会のトップとなるのは本年十一月二十九日の福岡大会で、別項の通りである。また、しんがりとするのは、明年

九月の東京での全国大会で、二十年にわたる楽しい豪華な会となるべく想を練っている段階である。

なお、静岡でも開催の希望がある。



遺影が飾られた百日祭の祭壇

菊日和に恵まれた十月十七日、俳人協会創立二十周年記念九州大会は来る十一月二十九日(日)午後一時より都立志会館大ホールで開催される。投句約四千についてはすでに選を終わし、発表を待つばかりである。

講演は松井利彦氏「虚子山脈の故水原秋櫻子先生」

厳かに百日祭の儀

俳句文学館ホールで

菊日和に恵まれた十月十七日、俳人協会創立二十周年記念九州大会は来る十一月二十九日(日)午後一時より都立志会館大ホールで開催される。投句約四千についてはすでに選を終わし、発表を待つばかりである。

講演は松井利彦氏「虚子山脈の故水原秋櫻子先生」

菊日和に恵まれた十月十七日、俳人協会創立二十周年記念九州大会は来る十一月二十九日(日)午後一時より都立志会館大ホールで開催される。投句約四千についてはすでに選を終わし、発表を待つばかりである。

講演は松井利彦氏「虚子山脈の故水原秋櫻子先生」



松井 利彦氏

訪れたときは午前朝がすんずん濡らして来ていて、草原は一部分を残すだけになっていて、立つてはいる鳥の脚の色も形もよく見えず、後頭部に垂れている冠毛の濃い青色が威厳に満ちて見えた。双眼鏡のく度も確め直しては、青鷺の威厳をほればれと眺めた。

河口に見る白鷺もまた美しくかつた。田圃や街中の川にのびのびと、姿態がすうらりとして、驚に堪えられぬ。少し川上の湖に双眼鏡の向きを変え、そこに鶴(しぎ)が驚く程並んでいるのを見た。嘴の長い先が上へ反っているのが大ソリハシギ、逆下に曲つているのがチウウシヤクシギと数回。千鳥もタイゼン・ムナギなども一々その名を渡るのが覚え切れない。みな南方へ渡る途中、こゝで羽を休めているのだから。

十月四日その日は、雲一つない秋晴れで、赤ん坊連れの会員もいたが、若い夫婦にかわるがわる抱かれています赤ん坊の名は「つばき」といふのであつた。(上野まゆ子)

九州俳句大会(第五回)御案内

九州の俳壇が合同して大規模に行う大会です。多数の御参加をお待ちしております。

日時 十一月二十九日(日)午後一時より(入場無料)

会場 都立志会館(福岡市中央区天神四丁目八十一〇)

講演 虚子山脈の人々 松井利彦氏(俳句評論家)

表彰 募集句の入選発表と講評及び表彰

当日句募集 参加者から一句の募集を行い、特選句には賞を呈します。

当日句選者 沢木欣一・神尾久美子・井尾望東・一田牛歌・伊藤通明・小田小石 (順不同)

☆事前の募集句に応募された方には、受付で入選作品集を一人一冊お渡しします。

☆交通の便 ●博多駅前交通センターより、西鉄バス②③系統に乗車、昭和通り、県庁通り下車、日銀横より北へ約三分(所要時間約十分)

●西鉄電車福岡及び地下鉄天神下車、日銀方向(北東へ徒歩約十分)

主催 社団法人 俳人協会
後援 朝日新聞社

トツプ切り九州大会 11月末 福岡都立志会館で

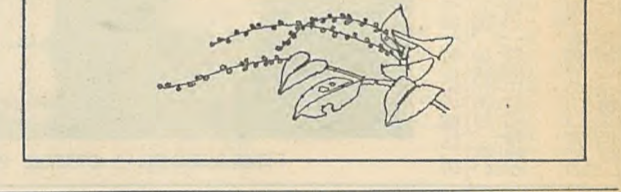
俳人協会創立二十周年記念九州大会は来る十一月二十九日(日)午後一時より都立志会館大ホールで開催される。投句約四千についてはすでに選を終わし、発表を待つばかりである。

十一月集

花芒 細川 加賀千美
手であける電車のとびら花芒
鳥渡る勿来の海の濃き日かな
波郷恋十三夜月照りわたり

行方 辻田 喜巳京 都
秋深く杳とぞ行方知れぬ本
橙や子宝よりも孫宝
下駄咬んで犬淋しがる冬の暮

白露 伊藤 通明 福岡
夕暮の雨となりゆく雁の数
白露に色に見えるる仏かな
夜の山大きくなりて冬に入る



春夏秋冬

野鳥の会の誘いで、厚狭(あそ)川の河口まで千鳥・鶴(しぎ)・鷺の類を見に行つた。実は、私の興味は青鷺にあつて、蕪村の「夕風や水青鷺の睡をうつ」の、青鷺の睡を見たかつたのだ。

有難いことに、多くの白鷺に交つて、二羽の青鷺がいた。どの白鷺よりも大きく、翼をひろげると、羽裏の青黒い色が、海の色のうらみかかぶさり、見る者のこころをのびやかにさせた。

俳人協会創立二十周年記念 第17回関西俳句大会

俳人協会員でない一般の方も投句・出席できます。多数ご参加下さい。

投句 3句(雑詠・未発表に限る)

投句式 普通の原稿用紙半面・句のあとに郵便番号・詳しい住所・姓を明記

投句料 一組につき千円(切手代用お断り)幾組でも可

投句締切 1月20日(消印有効)

投句先 〒665 宝塚市野上四丁目8の22
俳人協会関西支部振替口座神戸戸六六六
山口青柳・山口登子・阿波野青歌・大野林火・安住 敦・皆吉英雨・五十嵐掃水
米沢吾亦紅・山口波津女・右城暮石・山口草堂・高木晴子・橋本鶏二・下村非文
草間時彦・桂 権子・堀内 薫・山本古風・福本鯉洋・佐野まもる・津田清子
清崎敏郎・藤羽野行・後藤比奈夫・亀井糸游・土山紫牛・大橋敦子・堀口星眠・大島民郎・浦野芳南・見市六冬・森田 峰 (順不同)

賞 朝日新聞社賞・関西俳句大会賞・特選・準特選

大会 4月11日 大阪社会福祉指導センター(地下鉄谷町線・西成駅)井本農一氏

◎選者数名により予選を行います。

◎入選句集を全投句者に一人一冊配布します。

主催 社団法人 俳人協会
後援 朝日新聞社

恩師の遺影に見守られ

馬酔木60周年記念大会



記念大会であいさつする堀口新主宰

台風一過の秋空に恵まれた昭和五十六年十月三日、馬酔木六十周年記念大会が、丸の内日本工業倶楽部において開催された。

俳句大会、記念式典は、会場一杯の来賓者を得て、まず堀口新主宰の挨拶が先を飾った。

氏の新主宰としての決意を述べた挨拶があり、発行人たる古田の永原春郎氏の記念品贈呈とその謝辞、功労者表彰が続いた。さらに新主宰より大会誌の講評、各種賞品の授賞が行われた。

山本健吉氏の記念講演は、日本人の自然観より説き始め、晩年の秋柳子俳句の足跡に至り、氏の俳句のエッセンスも言及すべき豊かな内容のものであった。

記念晩餐会は、三階の煌々たるシャンテリアの下に会場を移し、来賓五十名を含む三百六十名が会し、午後五時より開催された。

山口青柳・大野林・皆吉泰爾諸氏より心ももった祝辞を頂き、安住敦氏が祝辞の中で「馬酔木」への投句の思い出に触れて「これから、我々の各氏もブレイクに同じ経験を語りつぎ、「馬酔木」を除いては昭和俳句を論じ得ぬことを、はからずも書き出し、湧き起る拍手は、七階開会ホールにおいて行なわれた。

鹿火屋も60年

二日にわたり 記念全国大会



花束を受ける原コウ子、京極杜清の両氏

(岡田貞峰報)

鹿火屋創刊六十周年記念全国大会が、十月十日、十一日の両日に亘って都立六義園、新宿区王子ラザールホールにおいて行なわれた。

同誌は五十年五月、「草津」が原石の手によって「鹿火屋」と改題された。昭和二十六年、石原後俊は原コウ子未亡人が主宰、四九年には原裕主宰に後継を譲り現在に至っている。戦後間もなく口語俳句運動が同門から起り、俳壇を賑わしたことがある。その後は有季定理の伝統として着実に活動している。創刊当初より今日まで一貫して鹿火屋を支えてきた原コウ子、京極杜清ともに健在の姿を見せていた。

一つは「しき夏の果」、水島理江子「ほろほろと山知りつくす青葉」木葉「ほかを受賞した」。(北澤瑞史報)

明日への自覚を誓い

かびれ6百号記念全国大会

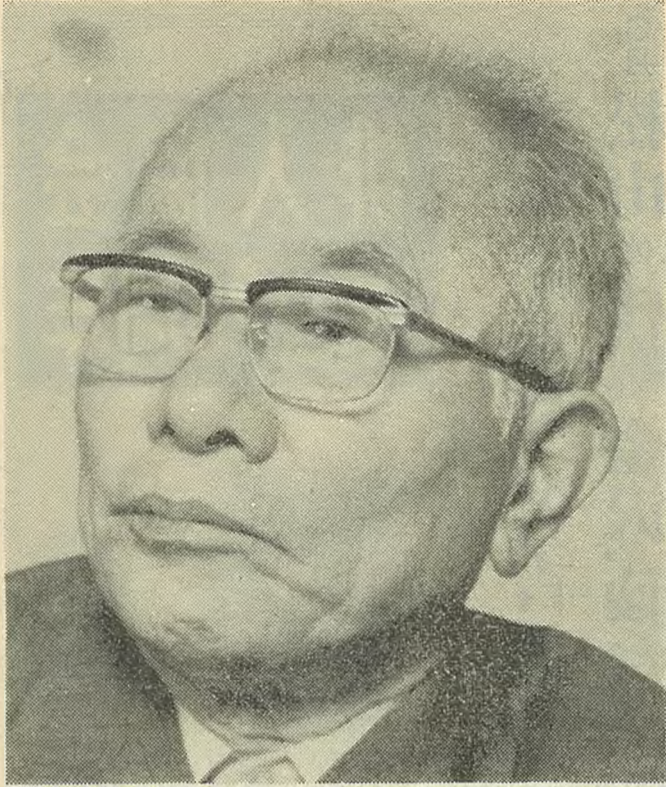


かびれの全国大会々々風景

さき「三月号を五周年記念号として「かびれ」は、四月に発祥の地日立習儀の麓に、先師大松松庵の遺影を建立、記念大会を開いた。さらに十月号をもって連環六百号を迎えるに当たって、十月四日東京・霞が関ビルディングにおいて六百号記念全国大会を開催し、各地から百五十余名が参集した。

当日は記念講演に村山古拙氏の「文人俳句の世界」と題する遺詔深いお話を拝聴。祝賀会に移り、小松松庵主宰は挨拶の中で、戦中戦後半年はが久刊となつた「かびれ」の受難時代を述べると共に明日へ向つて各人一層の自覚を促した。また柴田白葉氏始め来賓各位の祝辞を頂き、余興等賑わつたに新たな出発を誓い合つて、盛況裡に散会した。

(新井佳津子報)



九州俳句大会長 小原青々子

超人的に多忙こなす

月に句会指導四十三回、曆の書は行動中の車中で、唐詩日教を不出す驚くべき数。その選をこまかく愛して読むうちに、新新聞に連載のものも入花だ。まさに超人的な八面六臂の活躍である。

「片眼ながら、七十三歳に於て、執筆はもはや夜半の仕事。読者健康の秘訣は酒、煙草をやらず、食事はもはや「極少量」



⑤

わしい健康」と、張りのある博多弁で、口調はよどみがない。数年前に、眼を患い一失明。健康の秘訣は酒、煙草をやらず、食事はもはや「極少量」

三県の句友らが交歓

盛大に北陸会員の集い



「北陸会員の集い」の懇談会 (中央が古拙氏)

九月十七日(日)午後一時、富山市呉羽山の竹亭で、富山、石川、福井三県の協会会員の集いが催された。協会の理事古拙氏が講師として派遣され、出席五十名、雨天ながらも盛況であった。

吉沢卯一氏の司会で、主要会員の自己紹介、次いで古拙氏から来年は協会二十周年に当たり、会

員の名簿作成の予定で、各地区毎に支部を指定させて本部との連絡を確立したいこと、また会派で俳句大会と講演会を開きたいこと、その期日と会場、講師を早く決めてほしいことが計られ協議された。

句会午後二時出句の幅巨句を全員で互選、披露があり、次いで古拙氏の二時間に亘る講演があった。

水原秋櫻子率儀での山口青柳の再演のさい、実朝の金襴集には三

級品があるので一級品ばかりが、最近の句集には二級品ばかり描つたものが多く、これは職人俳句であること、最近感心した人として角川春樹、稲畑汀子、飯田龍太をあげる。人情に対する関心と業績に対する関心を縦横の軸にしたマネジアルグリッドで一九型、九一型、一一型、九九型、五五型に分類し、この観点からの子規研究のこと、最後に選句が大切であり、他人の句に感動することが大切な話で一同を魅了された。

このあと成績発表と表彰があり、少額後援懇談会に移り、なごやかには会員の集いの目的を果たして午後六時半散会した。

当日の主な作品は次の通り。

- ▽古拙氏 特選句 久々に来て呉羽の秋にふれて見し
- ▽高田句 品川豊喜子
- ▽高田句 品川豊喜子
- ▽高田句 庄田 喜子
- ▽高田句 川上 季石
- ▽高田句 川上 季石

名入会」と銘つての各支柱えりぬきの語の数が披露された。

俳人協会編「俳句カレンダー」

昭和五十七年度版の頒布について

一、体裁 月別十二枚綴り壁掛用

二、内容 青柳、林火、吾亦紅、晴子、爽雨、秋櫻子、風三樓、欣、青柳、誓子、敦、加賀、節子、汀女、草田男(順)の揮毫色紙、短冊のほか協会作家二百七十余名の俳句掲載。

三、頒布 一部一、〇〇〇円(協会渡し)。

四、送料 一部 全国一律 三〇〇円

五、地方発送は、数量及地域により、異なり。

六、基準送料

第一地帯 二一〇円 二一〇円 二一〇円 二一〇円

第二地帯 四二〇円 四二〇円 四二〇円 四二〇円

第三地帯 六三〇円 六三〇円 六三〇円 六三〇円

第四地帯 八四〇円 八四〇円 八四〇円 八四〇円

十一部以上は運送屋に委託。発送は自動車及国鉄を使用いたします。

一、発行予定 十月中旬

二、申込先 各位所属の発行所、及俳句会、やむを得ぬ方は、当協会カレンダー係、なお申しこみはお早めをお願いいたします。

(社) 俳人協会

石田波郷十三回忌記念

石田波郷遺墨展 入場無料

とき 昭和五十六年十一月二十日(金)より十一月二十一日(日)まで三日間

毎日午前九時より午後五時まで

ところ 俳句文学館 三階展示室

展示品 掛軸・額装・屏風・扇・陶器・魚紙・短冊・等約百十点的他 波郷句集はじめ全書書約千数点

主催 鶴俳句会

協賛 俳句文学館

俳句文学館紀要研究論文募集

▽校数 (三〇)〜五〇校(四百字詰)

▽締切 十月十五日

▽備考 未発表に限ります。テーマは明治以後の俳句文学研究。四百字程度の論文要旨を添付してください。

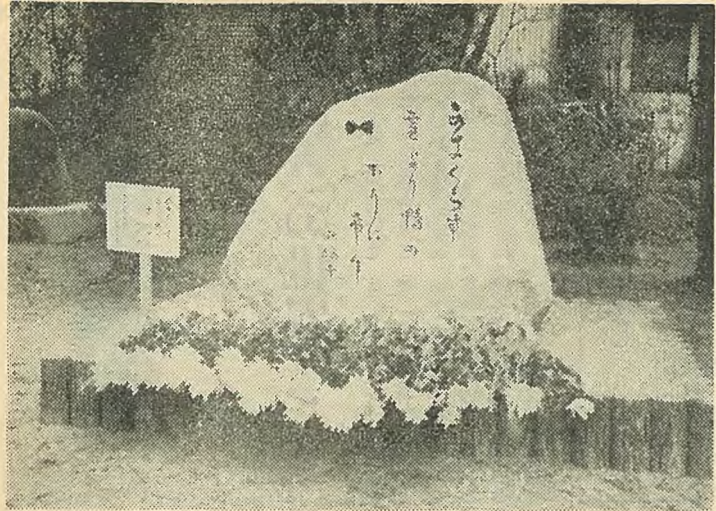
▽採否 編集委員に一任ください。俳句文学館の図書その他の資料を利用していただき、資料のお調べについては係で相談に応じます。

俳句文学館紀要編集委員会

委員長 香 西 照 雄

今年も「陽暦」季節がめぐり、風流の道具として使われる「陽暦」がほとんどで、本来の目的は「陽暦」が、や野原に野生して黄色の花を咲かせる。動物・習慣・季節の道具などが往來し

感動につつまれて、心から種子を、名入会」と銘つての各支柱えりぬきの語の数が披露された。



愛知・蟹江町の鹿島神社境内に 秋櫻子88基目の句碑

秋櫻子先生の享年に奇しくも合致した八十八基目の句碑が建立された。(写真)

九月二十日、愛知県蟹江町の鹿島神社文学苑で、秋櫻子代理田緑生を始め「俳句協会」等百余人の列のうちに除幕式が催された。

この建立については、この地に在住の建築家黒川昌吾氏(黒川喜章氏の実子)の個人財力御厚方によるもので、秋櫻子先生の生前にお許しを得た最後の句碑となつたのである。

名古屋市の西郊の蟹江は海抜ゼロメートルの水郷地帯で、近には県立野島公園もあるが、秋櫻子先生はこの地に「来遊の足跡が長く、病中のごときも、その晩年の撰集「余生」の中より最もこの地に相応しい作品としてかきくらす雪より鴨の下りに行が選定されたのである。

梧逸23基目の句碑

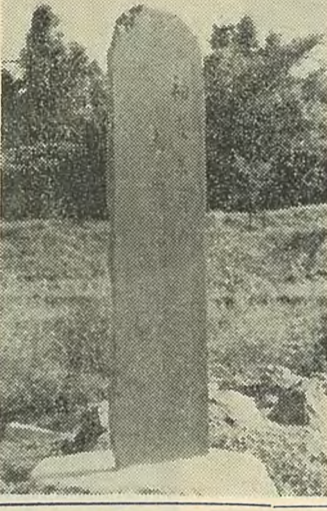
福島・浪江の「やすらぎ荘」に

十月四日、遊藝者連名義祝賀行の事の一として、「みちのく」浪江支部の人達の手により、福島の浪江町大堀郷、浪江町菅野老人憩の家「やすらぎ荘」前庭に建立された。(写真)

初来米寿のわれに米お辞儀遊藝者連名義は、そのメッセージの中で、「この句が、老を養われ人々の慰めになれば幸いである。」(原田青児)

また、十月十一日、創刊三十一周年を迎えた「みちのく」の年次大会が宮城県民会館で開催された。東京から、遊藝者連名義の代表として、原田青児編集長が出席し、主宰のメッセージを披露した。

なお、この鹿島神社境内には、夕ざれば水より低き花菜菜の心、中村村女、舟入に青草の繁るのみ、山口雪子、青草や水の蟹江に鮎鱈、加藤かけい、など十八基の句碑がすでに建立されており、全国でも珍しい文学苑を構成している。(原田 緑生)



随想

今年も「随想」季節がめぐりて来た。この日も最近は何処へ行って「冷房完備」クーラーや扇風機が普及しているためか忘れられた季節となつてしまつた。と云ふのが今年も「随想」の夏で、それは「随想」の「随」が「随」を「随」

季節の盛衰

風流の道具として使われる「露水」がほとんど、本来の目的は失われつつある。主流の「随想」は最近では「随想」を「随想」に置き換へたり、一定の長さの句に押し込めたりするものが増えて来てしまつた。若し人達が解らななう、その編者が、採用したか否かは良し悪しは、すたじかた



野見山ひふみ

「随想」の中味がなかなかなるもので、定着させていくべきものも増え集めていく作品の中に「見聞」が季節として登場してきているのである。大学の植物学者に問ひ合せた例で、涼を呼ぶ「ボストン玉草」「アジアンタム」「インモントウ」などが見られる。また航便の交通機関が発達し、世界の国々の交

2百名が長寿を祝う

「曲水」桂子主宰傘寿祝賀会



お祝いの乾杯をする参会者(梅山荘で)

昭和五十六年十月十四日、東京目黒区梅山荘において「曲水」主宰の桂子主宰傘寿祝賀会が好評に開催された。お祝いの乾杯をする参会者(梅山荘で)

お祝いの乾杯をする参会者(梅山荘で)

思ふこと

秋夜つれづれ

野竹 雨城

ふとソレのスイッチをいれたら、みちのく風の宿、という題字が目に入った。どんな歌かと思つたが、みちのく風の宿、といふ感じがしなかつた。

その前日だったか、これまた「みちのく」の旅、という男性の歌を耳にした。これら二つの歌、どんな意図でこんな題名を付けたか。現代の低俗化した

創刊号物語

雨月 竹腰 八柏

昭和二十一年と言へば、昔つすき配座をしていたことが分る。「旧山茶花」の四選者、即ち大橋櫻子、中村若沙、皆吉、藤村水樹が主たる雑誌の形態を定めた。この雑誌は、昭和二十一年、櫻子の刊行したのが、この年の九月、櫻子は勤務していた住友電気工業株式会社の伊丹製作所から名古屋製作所へ転勤を命ぜられた。この「旧山茶花」は、五選で終刊となった。名古屋へ単身赴任して櫻子が、家族を名古屋へ迎えた後も、雑誌発行については、ためらうものがあつた。特に、この「旧山茶花」を再刊号と題して、「二」の土地で二つ以上の俳誌が出ることを、必ず対立関係になつて面白くないものである。小生は、このことを深く憂ひ、今日まで起つたことであるが、何となく小生自身の身の限りのこと、持統の身、友好関係を美し、持統の世度と念願している。「二」の「旧山茶花」は、櫻子の第一

「山茶花」の旧友門

折も折、虚子、立子一行の、東京から能登への旅の途中、名古屋に立ち寄ることになり、櫻子自ら創刊号を手渡すことができた。

「創刊号」は、「俳誌」の内容は、櫻子の近況「龍の玉」と題して一〇句、その中に龍玉を譲り主は壽(い)のちな生を唯の信案とひたすら精選した。

この年の九月、櫻子は勤務していた住友電気工業株式会社の伊丹製作所から名古屋製作所へ転勤を命ぜられた。この「旧山茶花」は、五選で終刊となった。名古屋へ単身赴任して櫻子が、家族を名古屋へ迎えた後も、雑誌発行については、ためらうものがあつた。特に、この「旧山茶花」を再刊号と題して、「二」の土地で二つ以上の俳誌が出ることを、必ず対立関係になつて面白くないものである。小生は、このことを深く憂ひ、今日まで起つたことであるが、何となく小生自身の身の限りのこと、持統の身、友好関係を美し、持統の世度と念願している。「二」の「旧山茶花」は、櫻子の第一



『雨月』創刊号の表紙

弟に促されて発行

さて二十四年櫻子は「旧山茶花」時代の旧友、門弟から促され、止むを得ず「雨月」を発行することになった。名古屋の門下生は、この「雨月」の発行を、きびきびと受け、これに力を出した。櫻子は、この「雨月」の発行を、きびきびと受け、これに力を出した。櫻子は、この「雨月」の発行を、きびきびと受け、これに力を出した。

期	時間	講師
11月13日(日)	13時-15時	波瀾と私 山田みづえ
11月16日(水)	14時-16時	俳句の基礎 成瀬松桃子
11月20日(日)	10時-12時	切字について 神藏
11月23日(水)	18時-20時	感動について 市村究一郎
11月27日(日)	10時-12時	自作を語る 細川加賀
11月30日(水)	18時-20時	俳句講座と講評 細川加賀

期	時間	講師
9月16日(水)	18時-20時	「白田」 亜浪 村山 古郷
9月30日(水)	18時-20時	「久保田万太郎」 安住 敦
10月14日(水)	18時-20時	「萩原井泉水」 上田 都史
10月28日(水)	18時-20時	「長谷川かな女」 星野 紗一
11月11日(水)	18時-20時	「飯田 乾勢」 広瀬 直人
11月25日(水)	18時-20時	「芝不器男・富田大歩」 草間 時彦

昭和五十六年度・特別講座(夜間)

「近代俳句の展開」第三期

現代俳句の歴史を学ぶ特別講座です

期間 九月十六日(土)十一月二十五日まで六回

会場 東京都新宿区百人町三二二八-10 俳句文学館 電話 三三七一六六二

道順 国鉄 大久保駅西口下車 徒歩四分

会費 (全期間) 五,〇〇〇円 四,五〇〇円 (一日券) 一,〇〇〇円 八〇〇円

申込先 千原東京都新宿区百人町三二二八-10 俳句文学館

社団法人 俳句協会「近代俳句の展開」係 会費同封(一日受講は期日を明記)

協会員は姓の肩にその旨明記の上、現金書留でお申込み下さい。受講券をお送りします。講師ならびに時間割六時から八時半まで

昭和五十六年秋季 俳句文学館俳句講座

十月十六日(土)十一月十三日まで 毎週金曜日 五回

会場 東京都新宿区百人町三二二八-10 俳句文学館 電話 三三七一六六二

道順 国鉄 大久保駅西口中野寄り下車 徒歩四分

定員 八〇名

会費 (全期間) 四,〇〇〇円 三,五〇〇円 (一日券) 一,〇〇〇円 八〇〇円

申込先 千原東京都新宿区百人町三二二八-10 俳句文学館

社団法人 俳句協会俳句講座係 会費同封(一日受講は期日を明記)

協会員は姓の肩にその旨明記の上、現金書留でお申込み下さい。受講券をお送りします。

演題 講師ならびに時間割

【俳句講座費】 全期間受講申込者に対し、第二日に 雑談三句集、最終日に入選発表資料 無料を行います。

全回受講者には受講証を発行します。

日	時間	講師
10月16日(土)	13時-15時	波瀾と私 山田みづえ
10月23日(土)	14時-16時	俳句の基礎 成瀬松桃子
10月30日(土)	10時-12時	切字について 神藏
11月6日(土)	18時-20時	感動について 市村究一郎
11月13日(土)	10時-12時	自作を語る 細川加賀
11月20日(土)	18時-20時	俳句講座と講評 細川加賀

委員長 香 西 照 雄

健康の秘訣は酒、煙草をやら

執筆はもはや夜半の仕事。読「片眼ながら」七十三歳にさす、食事はもはや「梅干し」

の自己紹介、次いで古語論から 期日と会場、講師を早く決めては 来年は協会二十周年に当たり、会 しいこととが計られ協議された。

水原秋櫻子和儀での山口青郎の 甲斐の「二」、実朝の金機集には三

川上 季石 (熊田虎右衛門)

俳句がたゞ鑑賞

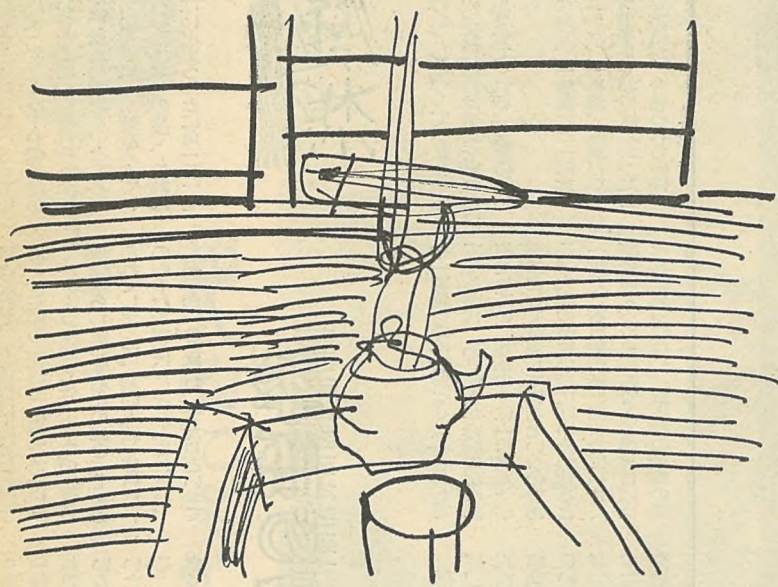
〈十一月〉

「直幹」の世界 松井 利彦

太い松の幹が見える。直立した松の木には葉は一つも残っていない。常緑である筈の松は、冬を迎えても葉をとめてるのが普通であるが、この松は落葉松である。「直幹」と把握し、状態を感覚化する。

落葉松は直幹落葉しつくして 山口 哲子

そのため、一切の葉を落しつくして、見事な一本の太い直幹となつて立っている。そして、この句から人生的意味も汲み取ることが、作者の長い俳句人生の蘊蓄を見ることが出来るのではないか。



近代俳句以後を中心に

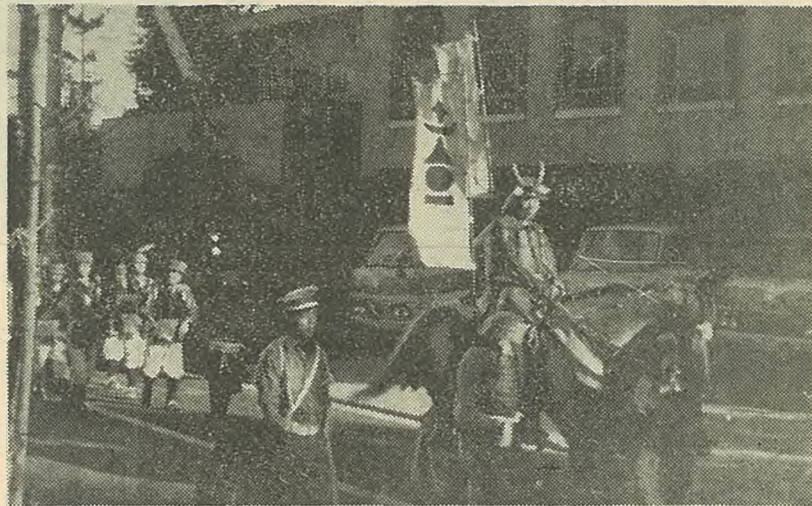
山形県俳史年表

山形県俳史年表

昭和56年度山形県俳史年表は、10月3日午後1時から山形市民会館小ホールにおいて開催された。文学部の今年度のテーマは「近代俳句の発展と鑑賞」を掲げ、P.A.R.T.V.として八俳句・定型と自由律Vが採りあげられ、その資料として「山形県俳史年表」がまとめられた。

俳史年表は俳句関係者の中で永年待望されていたもので、今回の文学部を機に山形県俳史協会が調査作成したものである。昨年の十一月より、秋沢猛会長を中心に調査委員会を構成して資料作りを行なった。その結果、正岡子規が文芸の革新・俳句の革新を断つべく仙台北より関山峠を越えて山形県入りした「はて知らずの記」の時代にとり、年表の中心を近代俳句以後に求め、月並俳句については、特に重要なものに絞つた。近い将来は、今回調査した資料の時代まで遡り、山形県俳史年表を完全なものに仕上げたいとの意気込みをもっている。

なお、今日の文学部では、秋沢猛会長が「和光利和と自由律俳句」を、細谷鶴吉副会長が「名和三藤竹と定型俳句」の講演を行なった。また鶴岡市出身の自由律俳



和光利和氏は「俳人と私」について語り、高橋と見えぬ元気が話し振りで山頭火のことに触れた。聴衆に深い感銘を与えた。(長谷川吹子記)

（長谷川吹子記）



しづれ 村上 麗人

松山や見わたりのくく一時雨 ったとこには年配の人がしづれ 麗人

私は懐に五十鈴玉を持って清らきと話しこんでいる。私も投句をやっていた友達が誘われ無理矢理に引張られて行ったといふ方がある。句会などというものがどんなものか知らなかつた。往つて見ると茶店に大きく風山から出ていて、美しい風景を眺めながら記してあった。玄關の奥で中村秀好と王城と大勢の人が部屋の壁を背に並んでいた。やがて席巻が出た。それは、「雪」「冬」「冬」通された。あとになって王城に「あれ」「あれ」の中の「冬」頼むと鉄斎の画がその頃百円で「あれ」といふのは一体どんな事柄なのかわかると感した。やが

国定公園大沼湖畔に 鎌田氏の句碑

北海道の国定公園大沼湖畔に、鎌田水子氏の句碑が、俳誌「青原」の有志に依り建立された。碑文の句は、花鳥池畔に居れば妻も美しい 水子

八月二十日の台風の中、多数の参加を得て除幕式が行われた。

謹 悼

- 次の方が物故されました。謹んで哀悼申し上げます。
- 昭和55年 横山龍瓶 (1.15) 曲水
 - 古橋桂花 (6.9) 水明
 - 昭和56年 浅野水清 (6.23) 曲水
 - 松田大重 (7.31) 波柿
 - 津田好 (8.3) 木語
 - 広岡三景 (8.4) かびれ
 - 竹田環洋 (8.15) 河
 - 網代錦泉子 (8.19) 雲母
 - 川瀬一貫 (9.1) 同人
 - 山田半歩 (9.3) 曲水
 - 林水明 (9.9) 狩
 - 岡本耶娘 (9.24) 若菜
 - 小森石洲 (10.1) 雪聲
 - 内海渥丹 (10.6) 鶴
 - 簡牛五黄 (10.9) 鶴・泉
 - 山田田連河 (10.10) 瀬奈

俳人協会・俳句文学館年末始予定

- 十一月十五日(金) 図書室開館納め
- 十一月十六日(土) 仕事納め
- 昭和五十七年 一月五日(火) 仕事始め
- 一月八日(金) 図書室開館開始
- 一月十日(日) 関西俳句交歓会
- 一月十一日(月) 会員交歓会(午後二時～四時)

百人町由縁の 鉄砲組百人隊 文学館前を練りあるく

全国俳句大会も無事終わった翌日の九月二十七日、俳句文学館近くの百人町・曾中稲荷神社で例年行われた、前日(二十)に変わった秋晴れのもと、火なわ銃を手にした鉄砲組百人隊が出陣した。

編集室から

俳人協会は昭和三六年二月二日に飯田橋の天松閣において設立総会を開いた。出席者は一八名、因みにその時の会員は、顧問 鮎野、風生、秋櫻子、青野、雪子五氏を含めて合計三〇名であった。その後会員数は翌年五月の春季総会を開くまでは二五名になり、さらに三八年三月には二二名と増加の一途を辿るのだが、二〇年後の今日、六七〇名を数えるに至ることは当時の誰も思いも及ばなかったことであろう。同時に、飯田鮎野氏(37・10・3)逝去が顧問に就任されていたことを知る人も少ない。このたび創立二〇周年を迎えて全国各地に記念行事を繰り広げんとするに当たり、協会生みの親で、その後故人となられた多くの先輩諸氏の偉業を偲び、ご冥福を祈るや切である。(宮下)

『自註現代俳句シリーズ』より抜粋

第三期「林 瑞集」より
満月へ枯葉の昇る一葉忌
十一月二十三日、波郷の準備を了えて帰る夜道に満月が昇った。風の枯葉がひらひらと月へ昇っていった。一葉と波郷は天上で会うのであろうか。

第四期「雨宮昌吉集」より
鷹旋る渡る気流の刻待ちつつ
大空のかなたに胡麻粒程の鷹の一群がゆくりと弧を描いていて、これと決めた上層気流に乗るやいなや矢のように渡って視界から消えて行った。

第二期「加倉井秋集」
初菊や拈華微笑の香を今に
秋迎が、霊鷲山で、説法の時、花をひねったのを見て、迦葉がその意を悟り、微笑したという説話の花の匂いは、初菊の香のようではなかったか。

自註現代俳句シリーズ
第三期 四十冊
既刊(五十音順) 赤松蓮子集・磯貝碧路集・上野幸子集・浦野芳南集・江口竹亭集・大竹きみ江集・勝又一透集・きくちつね集・京極杜澤集・草間時彦集・近藤一鴻集・佐野もも集・貞弘集・下村非文集・下村ひろ集・瀧春一集・瀧澤伊代集・殿村菟絲子集・鳥羽とほる集・中西彌土集・長谷川双魚集・林朝集・原コウ子集・平井さち子集・深見けん二集・福本鯉洋集・細川加賀集・皆川盤水集・宮下翠舟集・村上しゆら集・村田篤集・村山古郷集
続刊(五十音順) 稲垣きくの集・大島民郎集・加藤三七子集・津田清子集・八木林之助集・山口草堂集・吉田鴻司集・米沢吾亦紅集

装本、編集などすべて第二期に準じます。昭和五十五年六月発売以後、毎月三冊の子定にて刊行。一冊 八八〇円(送料二〇〇円) 全四十冊一括申し込みの場合 三万三千元(送料共)

〒一六〇 東京都新宿区百人町三二二八一〇
申込先 社団法人 俳人協会
電話 〇三(三六七) 六六二番
振替 東京 六一二七三番